©へるす出版

特集

子どもの居場所2023 広がる小児看護の未来

特集にあたって

子どもの居場所の現在とこれから

子どもは地域のなかでどのようなところにいるのか，子どもが安心できる場所とはどのような場なのか，その場にいることは子どもに何をもたらしているのか。

本特集を企画するきっかけとなったのは，日本小児看護学会第33回学術集会と日本老年看護学会第28回学術集会（学術集会長：酒井郁子先生）の合同企画「子どもとお年寄りが醸し出す居場所」というテーマのシンポジウムである。このシンポジウムでは，子どもとお年寄りが交流する居場所づくりにおいて，実践家，研究者の立場から，それぞれが取り組む活動の趣旨と実際をご紹介いただき，子どもとお年寄りが交流することで何が醸し出されているのか，居場所のあり様をどのようにとらえて提供しているのか，さらに，今後の発展をどのように見据えているのかについて発表していただいた。看護小規模多機能型居宅介護，地域づくりを目指した介護保険サービスとNPO活動を組み合わせ，子どもから高齢者，障がいのある人へのサービスを提供する法人，高齢者ケア施設と保育園を一体的に運営する法人，大学で提供している多世代交流プログラムなどの実践をうかがい，子どもたちだけでなく，さまざまな世代が交流することにより，相互尊重，ケアマインドが生まれていることを実感した。

ほかにも，学校，こども食堂，医療的ケア児の地域生活を支える場など，いろんな場で社会的な，あるいは，健康ニーズのある子どもがいる。

子どもが安心して自分の居場所だと思える場をつくること，子どもがその場にいる意義を見出せること，そのために看護職者ができることは何か。子どもと家族の生活を支える看護職者の役割は，それぞれの子どもの居場所でどのように発揮されるのか。

本誌の2015年８月号で，特集「広げよう 小児看護の可能性：あらゆる場で活躍！子どもと家族の生活を支える看護師たち」を日本小児看護学会小児看護政策委員会（委員長 江本リナ先生）で企画した。そのときに，児童養護施設や自立支援施設などで看護職者が活動している様子を取材し，子どもにかかわる看護職者はもっとさまざまな場で活動する必要があると感じた。

SNSやICTの発展，貧困格差などを背景に，子どもの居場所はどうなっているのか。前回の特集から８年を経て，看護職者の活動は広がり，子どもたちのさまざまなニーズにどのように応えているのか。

現在の子どもたちの居場所を概観する本特集が，そこで展開されている看護，あるいは，今後必要となるであろう看護について考えていくきっかけとなれば幸いである。

荒木暁子 Araki Akiko
東邦大学看護学部小児看護学教授
本田順子 Honda Junko
兵庫県立大学地域ケア開発研究所教授